

「与える心」

おはようございます。青野光枝です。私が介護相談員として施設を訪問するようになって10年が経ちました。介護相談員になったのは、義理の母が脳梗塞で倒れ、半身不随になった時に、手さぐりの介護方法に不安を持ち、介護をしながら、より良い介護方法を学ぶために学校に通った6年間の経験を人のために生かしたいと考えたためです。介護相談員として、介護する側、される側の方々のお話を聞く一方で、私自身も介護を身近に感じながら生活を送っている1人です。

今年の1月に母がトイレの敷居でつまづき、転倒し、大腿骨を折りました。母は朝の7時に転倒してからすぐに緊急搬送されず、結果的に緊急搬送されたのは、夜の8時でした。冷たい廊下の上で動けず、13時間倒れたままの状態であったため、手術は非常に難しいものになりました。医師の方と母のがんばりによって手術は成功しましたが、本当の試練はそこからでした。骨折するまでは、自分のことは全て自分でできる立派な主婦であった母が、リハビリで一步を踏み出すことを怖がり、しばらくの間手すりにつかまっただけで動くことができませんでした。担当の医師やリハビリの先生の励ましで、母がやっと一步を踏み出してくれた時の言葉にできないうれしさは、今でも忘れることができません。入院中、様々な方にお世話になり、無事退院した後、自宅での介護が始まりました。勝手知ったる住み慣れた家が一転し、歩行器なしでは歩けない母にとって不自由な家となり、家事一切ができなくなりました。要介護者となった母を食事、洗濯、掃除はもちろん、人が生きていくうえで必要なことの全てを母と同居する私の妹が介護というかたちで手助けしてくれるようになりました。妹は、母が、寒さと激痛に耐えた13時間を片時も忘れず、仕事を続けながらも1人で懸命に介護をしてくれ、時々しか手伝えない私のことさえ気遣ってくれました。そんな妹をみて、自然と私の中で、介護される側の「母」、介護をする側の「妹」という構図ができあがっていました。

しかし、ある日その構図が壊れる出来事に遭遇しました。仕事に行く妹に母のことを頼まれた私が実家に行くと、これまで介護されるばかりだった母が妹に届いた手紙をきちんと分類したり、歩行器を押して台所まで行って、夜仕事から帰ってくる妹のために、台所まで行ってカステラを切って冷蔵庫に入れていたのです。少しでも自分のできることを探し、人を思いやる母の姿をみて、介護を「されるだけ」の人はいないのだと、改めて実感しました。

介護をする側、介護をされる側、どちらかが一方的に寄りかかる関係はないのです。人を思いやる心・言葉・行動は、どんな状況・立場であっても「与える」側になれるのです。介護をする側の少しでも支えになりたいと思う心と、介護をされる側の感謝の心、同じように美しいことを母や妹の姿から学んでいます。

現在、母は歩行器で家の中だけでなく、家の外回りも歩けるようになりました。リハビリの成果と、関わってくださる多くの人の助けがあり、母は日々、歩みがしっかりしてきています。周りの皆さんの温かい気持ちに感謝しながら、この感謝の気持ちを介護相談員として活動することで伝えていきたいと思っています。